

平成30年度常葉大学地域交流・連携推進事業

—「多文化共生に資する日本人住民と外国人住民の交流事業」の報告—

坂本 勝信, 山下 浩一, 谷 誠司,

内山 夕輝¹, 鈴木由美恵²

Report on “Exchange Project Between Japanese and Foreign Residents Contributing to Multicultural Coexistence” in the Project for the Promotion of Community Exchange and Collaboration at Tokoha University in 2018

Masanobu SAKAMOTO, Koichi YAMASHITA, Seiji TANI,
Yuki UCHIYAMA, Yumie SUZUKI

2019年11月8日受理

抄 録

本稿では、平成30年度に常葉大学からの補助金を受けて実施した、公益財団法人浜松国際協会との地域交流・連携推進事業の報告である。本事業では、1)生活者としての外国人の日本社会へのスムーズな適応を促すこと、2)常葉大学学生の多文化共生の意識を涵養すること、3)外国人住民と日本人住民の交流の成果を社会に発信すること、を目的として掲げた。本学学生は、主に、外国人学習者が取り組む日本語プロジェクトワークに様々な形で関わり、交流を行った。学習者は大学生との交流で日本社会との接点を感じ、また、プロジェクトワーク発表会での成功体験を通じ、日本で生活していくための自信や力を得た。一方、本学学生は、学習者と接する経験や施設・授業見学等を経て、日本人も外国人も「共に社会を創る住民」であるとの意識が芽生える様子が窺えた。

キーワード：多文化共生 日本人住民 外国人住民 地域日本語教室 プロジェクトワーク

1. はじめに（目的・概要）

日本は、急激な人口減少問題を抱え、深刻な労働力不足に直面している。具体的には、2018年10月1日時点の総人口は、1億2644万3千人で、8年連続の減少となっており、生産年齢人口（15歳～64歳）は前年比51万2000人減の7545万1000人で、

¹ 公益財団法人 浜松国際交流協会 主任

² 公益財団法人 浜松国際交流協会 コーディネーター

比較可能な統計のある1950年以降最低となっている（2018年4月12日発表の総務省人口推計による）。そのような中、在留外国人は、2018年末に273万1093人（前年末比6.6%増）（2018年3月22日法務省入国管理局報道発表資料による）と過去最高を記録し、在留外国人が日本の人口減少幅を小さくしていることがうかがえる。

このような国内の実情からも、外国人と日本人が同じ住民として相互に支え合いながら暮らしていく多文化共生社会の実現が急務であるが、受け入れ体制（ハード面）も日本人側の心的準備（ソフト面）も十分に整っていないのが現状である。

一方、浜松市には2018年1月1日現在22,815人の外国人住民（83国等）がおり（住民基本台帳による）、在留外国人の全人口に占める割合は、2.8%と全国平均の2.0%を大きく上回っている。また、市には公益財団法人浜松国際交流協会（以下「HICE」）があり、35年の歴史を有する。HICEは、市の委託を受けて浜松市外国人学習支援センター（以下「U-ToC」）にて日本語教室を開講しており、約140人の外国人を対象に日本語教育を行っている（2018年度実績）。そのアドバイザーを事業代表者の坂本が務めていることから、クラス運営に必要な日本人との交流活動に本学大学生の参加を促してきており、多文化共生の意識涵養を試みてきた。

本事業では、過去の活動を発展的に継続したが、以下の3つを主目的として掲げ、活動を行った。

- 1) 生活者としての外国人の日本社会へのスムーズな適応を促すこと
- 2) 常葉大学学生の多文化共生の意識を涵養すること
- 3) 外国人住民と日本人住民の交流の成果を社会に発信すること

2. 外国人・日本語教育をめぐる国内の動き

2018年・2019年は、外国人・日本語教育をめぐる日本の政策に大きな変化が見られ、外国人の受け入れに係る重要な法律が改正、制定されたが、以下で紹介する。

2.1. 出入国管理法の改正

一つ目は、「出入国管理法」の改正であり（2018年12月）、2019年4月1日に施行され、新たな在留資格「特定技能」が新設された。日本の深刻な労働力不足を補うのが目的である。人材不足が深刻な「介護」や「外食」など14業種³を対象に一定の技能と日本語能力⁴を有する外国人に日本での就労を認め、単純労働における外国人材活用に門戸が開かれた。2019年以降5年間で34万5000人の外国人労働者の受け入れが見込まれている。

³ 対象の14業種は、上記以外に農業、漁業、飲食品製造、ビルクリーニング、素材産業、産業機械製造、電気・電子情報関連産業、建設、造船・舶用工業、自動車整備、航空、宿泊である。

⁴ 日本語能力試験N4レベルの日本語力が必要とされている。

2.2. 日本語教育推進法成立

二つ目は、2019 年 6 月 28 日に公布・施行された「日本語教育の推進に関する法律」である。これにより、国や自治体、また、外国人を雇用する事業主の責務が明確になり、日本語教育を希望する外国人の希望や能力に応じて「機会が最大限に確保される」ことが求められることとなった⁵。

3. 浜松市の多文化共生社会に向けた取り組み・HICE・U-ToC の概要

浜松市は、東京と大阪のほぼ中心に位置し、温暖な気候で平野部が広く、水資源も豊富なことから、ものづくりの盛んなまちとして発展してきた。古くは繊維業から始まり、楽器、輸送用機器と製造業を中心とした産業が広がっている。1990 年の出入国管理及び難民認定法改正に伴い、「定住者」の在留資格が創設されたことから、日系ブラジル人による出稼ぎブームが到来し、浜松市にある企業は彼らを労働者として受け入れるようになった。それ以降、2019 年現在に到るまで、浜松市は日本一ブラジル人の人口が多いまちとなり、様々な多文化共生施策が行われている。

2008 年秋、浜松市ではアメリカに端を発した世界的金融危機のあおりを受け、派遣労働者として雇用されていた外国人の多くが失業する事態に陥った。当時、国や県、市による、日本語学習支援を中心とした様々な緊急経済対策事業が行われる中、2010 年 1 月、浜松市西区に U-ToC が開設された。HICE は U-ToC が開設されて以来、運営を受託しており、外国人市民を対象とした日本語教室、日本語ボランティア養成講座、多文化体験講座、支援者のためのポルトガル語講座、地域日本語学習支援、外国につながる次世代の学習支援の 6 つを柱として事業を展開している。

浜松市では、外国人が集住する都市として目指す将来像を浜松市多文化共生都市ビジョン⁶としてかかげており、2013 年～2017 年度の 5 年度間に第 1 次が、2018 年～2022 年度の 5 年度間に第 2 次ビジョンとして計画が示されている。第 1 次、第 2 次ビジョンともに、

1. 日本人市民と外国人市民がともに構築する地域（協働）
2. 多様性を都市の活力の源泉として、発展していく地域（創造）
3. 誰もが安心して暮らしていくことができる地域（安心）

という 3 つの方向性のもとに重点施策が述べられており、日本語学習の重要性は、3 の誰もが安心して暮らしていくことができる地域（安心）の施策の中で言及されている。両ビジョンにおいて、言葉の言い回しに多少の違いはあるものの、共生のためには、外国人市民も生活言語である日本語の習得に加え、地域社会の一員として基本的な生活ルールを身につける必要があると明記されており、浜松市が外国人市民を地域

⁵ 総則の基本理念の [1] に、「日本語教育の推進は、日本語教育を受けることを希望する外国人等に対し、その希望、置かれている状況及び能力に応じた日本語教育を受ける機会が最大限に確保されるよう行われなければならないこと。」と記されている。

⁶ 浜松市ホームページ「多文化共生都市ビジョン」
<https://www.city.hamamatsu.shizuoka.jp/kokusai/kokusai/kokusaitoppage.html> (2019 年 11 月 6 日閲覧)

の構成員として位置付け、安心なまちづくりのためにも、多文化共生に向けた日本語学習支援を重視していることが見てとれる。

また、第 2 次ビジョンにおいては、外国人学習支援センターを拠点として、生活者としての外国人を対象とした日本語や日本文化習得のための講座を実施し、(一部省略)、定住化が進む外国人市民のライフステージの変化に合わせた日本語学習支援体制の充実を図ると述べられている。

こうしたビジョンと連動しながら、U-ToC では外国人市民に対する日本語教育を実施している。受講対象者は、中長期滞在が可能な身分系の在留資格を持つ外国人市民を優先としており、受講費用は無料、また託児サービスも無料で行っている。公営の日本語教室として実施していることから、レベルは日常生活に最低限必要な初級が終わるまでであり、言語保障として実施されているのが特徴的である。また、テキストを用いる初級クラスの終了後には坂本監修のプロジェクトワークへと移行し、学習者が初級で学んだ日本語知識をアウトプットする実践の場が用意されている。このことも U-ToC 日本語教室の大きな特徴であると考えられる。

4. 事業内容・方法

4.1. 本事業の活動内容と期待される効果

「1. はじめに」で挙げた 3 つの目的達成のため、主に次の「活動」を行った。

- 1) U-ToC 日本語教室で実施するプロジェクトワーク (外国人が、興味あるテーマで日本人に対してインタビュー等を行ってデータを収集し分析、考察をして発表する授業) (以下「PW」) にインタビューイーやアンケート回答者として参加する。
- 2) PW 発表会 (本学留学生別科生と U-ToC 学習者が合同で実施) にて、準備や運営スタッフ、聴講者として関わる。
- 3) U-ToC の施設見学及び、日本語の授業参観に参加する。

PW は、U-ToC 日本語教室の授業活動だが、本学の大学生が参与することによって、学習者にとっては、生の日本語や日本人の考え方に触れる機会となり、教室活動と日本社会がつながることを意味する。そして、大勢の前で発表する体験によって、日本人に認められたいとの承認欲求が満たされ、日本で生活していく自信を得ることも期待される。

また、本学の学生は、様々な形 (インタビューイー/発表会の運営スタッフ・聴講者/施設見学者/授業参観者 など) で外国人住民と接点を持ち、交流するとともに、外国人を支える浜松市の取り組みを知る。これらを通して、「共に社会を創っていく住民」との意識が涵養されると思われる。

さらに、副次的な目的として日本語教育における第二言語習得の現場を参観させてもらうことにより、外国語教育や外国語学習に関する気づきや学びを得ることとなる。

4.2. プロジェクトワークについて

4.2.1. 語学教育におけるプロジェクトワーク

田中・斎藤（1993,pp.140-143）では、PW を「ある外国語を学習するときに、クラスまたは学習者のグループでなにかのプロジェクトを設定し、それを遂行していく過程でその外国語を多量に使用しながら学習していく活動」とし、「学習者にとって知的な興味、関心の持てる現実的なもの」で、プロジェクト遂行過程で「目標言語の母語話者とインターアクションが行われるようなプロジェクトが望ましい」と述べている。そして、PW を母語話者とのインターアクションのタイプ別に、1)「成果発表型のプロジェクト（例：学習者が共同で新聞を作成し、それを一般の日本人に読んでもらい意見を聞くなど）」、2)「調査型のプロジェクト（例：ある問題について日本人にインタビューしたり、アンケートしてその結果をまとめるもの）」、3)「共同作業型のプロジェクト（例：最初からグループに日本人に参加してもらい共同で行う料理教室や日本社会の調査など）」の3つに分類している。また、日本人とのインターアクションは、3) > 2) > 1) の順に豊富であるとしている。筆者は、「正確さの学習（言語形式のかたちや意味、用法を確実に覚え、産出できるようにする学習）」と「なめらかさの学習（言語形式を適切な状況でコミュニケーションのかたちで使用できるようにする学習）」に分けられる外国語学習において、PW を典型的な「なめらかさの学習のための活動」としている。さらに、PW を言語形式の学習が優先される「形式優先型」でなく、「内容優先型」であるとし、学習者の興味や関心に合った内容学習を進める過程で二義的にことばの学習を行うものであると述べている。

4.2.2. U-ToC のプロジェクトワークの特徴

U-ToC の PW は、田中・斎藤（1993）の3分類の「調査型のプロジェクト」を採用している。具体的には、外国人学習者が、日本や日本人に関して興味あるテーマでアンケートを作成し、実際に日本人に対してインタビュー等を行ってデータを収集し、分析、考察をして発表するものである。

また、U-ToC の PW における特徴は様々あるが、特に重視する5点を次に挙げる。

1) 「学習者に自信を与え、勇気づける」を念頭に置いたカリキュラム編成

U-ToC 修了後も日本社会で生活していく学習者には、初級後半の日本語レベルでは困難も伴うとされる PW へのモチベーションを維持し、やり遂げてほしいと願っている。最後の発表を乗り越え、自信を持ってもらえるよう勇気づけを大切にしており、その理念がカリキュラムに反映されている。具体的には、次の通りである。①「すべて自力で」でなく、過去の受講生作成のテーマやアンケート項目を必要に応じて提示し、各自興味があるものをいくつか選択してもらう。②日本人へのインタビューは、「U-ToC 職員→日本語ボランティアの方々→大学生・一般市民」のように、接点と慣れの面で外国人に近いグループから遠いグループへと段階的に実施する。③授業の最初に行う「語彙小テスト」の難度は低めに設定し、学習者

が持つ語彙リストの例文を覚えたらできるレベルにしている。④発表会の練習は、「グループ内で→クラス全員の前で→本番と同形式のリハーサルで」と段階を踏んで複数回行っている。⑤発表会の聴講者は、一般市民よりも日本語ボランティアなどの割合が高い。市民にも広報しているが⁷、結果的に日本語ボランティアの方が多くなっている。しかし、PWは学習者を勇気づけるという大きな目的があることから、外国人に興味を持ち、優しく接することに慣れている方々の方が望ましい面もあるので、参加比率を逆転させるために広報の方法を変更することは考えてこなかった⁸。

2) 「話す」「聴く」「書く」「読む」の「4技能」を総合的に高めることを目標に

一般的に、地域日本語教室では、「話せる・聴ける」ことに主眼を置くことが多いが、いわゆるサバイバル・ジャパニーズ⁹の習得でなく、今後日本で生活する上で直面する読み書きにも対応できる力を身につけてもらえるよう意識してカリキュラム・授業づくりをしている。

3) 課題・機能達成に必要な既習の言語知識が運用できるようになることを目標に

U-ToCでは、PWを、開講するクラスの最も上に位置づけており、ここに至る過程では、初級日本語総合教科書の『できる日本語 初級』¹⁰をメインテキストにして日本語の授業を行っている。初級で学んだ言語知識の中には、理解レベルで留まり、「許可を得る」「複数の行動の中から主なものを2、3挙げる」など、課題や機能を達成すべき場面で適切に運用できるまでには高まっていないものもある。そこで、PWでは、例えば、前者は「インタビューを録音してもいいですか」を、後者は「日本のお年寄り、コンビニで働いたり、車を運転したりして、とても元気です」などの文法事項（下線部）を自力で想起し、使えるようになることも目標に掲げ、授業を展開している。

4) 学習者の自己実現や成功体験をサポートするための手厚い講師配置

PWは、1名のメイン教師に加え、補助者2名が配置されており、少人数制で手厚く学習サポートを行っている。日本語習得だけでなく学習者の生活環境に配慮しながら、各個人に合わせてフォローをしている。これは1)の「学習者に自信を与え、勇気づける」にも通ずる。

⁷ 市民へは、U-ToCのホームページやU-ToC・HICEのfacebook、また、『HICE NEWS』（月刊誌）などにて広報している。

⁸ 但し、今後は多文化共生社会が進むことを鑑み、広く一般にも周知していきたいと考えている。

⁹ 鹿嶋（2005）は、「サバイバル・ジャパニーズとは、『日本で生活する際に、コミュニケーションのために最低限必要な知識および言語として、短期的に教えられたり、使用されたりする日本語』とまとめることができる。」（p.37）としている。

¹⁰ 言語知識を使って、「何がどのようにできるか」を重視し、プロフィシエンシー（Proficiency、熟達度）の考え方に基づいて各課の行動目標を設定してある教科書。レベルは、日本語能力試験N5からN4前半の日本語能力の獲得を目指している。

5) 「地域日本語教育専門家」として U-ToC の日本語教師の知識・能力を高める配慮

地域日本語教室では、ボランティアによる日本語指導が一般的だが¹¹、U-ToC では、ボランティアと日本語教師の職掌分担が明確である。ボランティアには学習者との交流を主に、日本語の授業は、有資格者である日本語教師が行っている。

2010 年度文化庁日本語教育研究委託「生活日本語の指導力の評価に関する調査研究：報告書」(pp.133-134) では、地域日本語教育専門家¹²に求められる知識・能力¹³として次の A～F (「 」内) の 6 つが挙げられている(「…」の後は、具体的内容。筆者が PW に関わりの深いと判断したもののみ報告書から抜粋)。

A 「日本語教育に関する知識・能力」

…日本語教育能力検定試験で求められる知識・能力を 1 つの目安とする

B 「日本語教育に関する実践能力」

…状況を適確に把握し、臨機応変に対応する力・学習者の能力・発話を引き出す力。
質問力およびコメント力

C 「“その地域社会”を理解し、生きる力」

…地域社会で一人ひとりの自己実現と「場づくり」の重要性を理解する力

D 「企画立案能力」

…現状を把握する力・目標を設定する力

E 「人をつなぎ、動かす力」

…交渉したり、調整したりする力・人々や機関などを巻き込み、共創的にことを進めていく力・人をつなぎ、ネットワークを構築する力・物事を的確に判断し、決断する力

F 「対人関係を築く力」

…簡潔・的確に伝えたいことを他者に伝える力・相手から目的に応じた情報を聞き出し、的確に聞き取る力・異なる価値観を認め合う力や相手に共感する力・場や状況を把握し、他者とコミュニケーションする力

U-ToC では、担当教師に PW に関わることを通して、上記 B～F を意識・体感し、地域日本語教育専門家として成長してほしいと考えている。

PW はワーク遂行を個人あるいは、ペアで行うため、作業進度に差が生じる。また、生活上のトラブルや、組んだパートナーとの相性の問題など、様々な要因により、時に学習意欲の低下などが起こる。そのような場合には状況を読み、臨機応変に対応しなければならない。また、日本や日本人について何に興味を持ち、何を聞きたいのか

¹¹ 平成 29 年の日本語教師数は 39,588 人であり、そのうち、ボランティアが 22,640 人で、57.2%を占める(文化庁「平成 29 年度日本語教育実態調査」による)。

¹² 報告書では、地域日本語教育専門家には「日本語教育の基礎的な知識や実践能力だけではなく、地域における定住外国人の言語生活を理解し、その地域の特性を理解した上で、日本語学習支援を目指すことが求められる」(p131)としている。

¹³ 正確には「地域日本語教育専門家やコーディネーターに求められる知識・能力」と記されている。

等、考えを引き出すとともに、学習者の表出したもの・作り出したものに対して的確にコメントをする力量が問われる (B)。そして、取り組みの成果を地域在住の多くの日本人の前で発表するが、その過程で学習者に寄り添いながら、地域社会に溶け込むための助言やサポートを明示的にも暗示的にも行っている。また、ゴールに至るまでの努力と発表時の成功体験が自己実現にも繋がることから、必然的に「場づくり」の重要性への気づきが生まれる (C)。また、PW では、コース全体の構成や流れ及び、各回の内容や到達目標が現状に合っているかを把握するため、コース前、コース中 (毎回の授業及び、授業後のミーティング)、コース後 (振り返り) に話し合い、微調整していく。この一連の過程に関わることを通じて、企画立案力が磨かれると期待する (D)。さらに、ワーク遂行に必要なインタビューイーを確保するために、With-U-Net (U-ToC の日本語支援者団体) や託児の方々 (U-ToC 内設置の子供を持つ学習者のための無料託児所スタッフ)、HICE 職員、大学生などに働きかける。その組織や人をどう巻き込み、どのように授業内で学習者に関わってもらうかについて、教師は直接的・間接的に関与することとなり、的確な判断力・決断力が求められる。同時に、市民に向けた発表会は、まさに外国人住民と日本人住民をつなぐ役割を体感できるものである (E)。加えて、教師と学習者が向き合いながら共同作業をする中においては、考え方や価値観の相違に直面するが、異なりへの寛容さや共感する力が必要となり、それがコミュニケーション力を鍛えることに通ずる。また、複数の教師・補助者にて毎回の授業を運営する関係上、教案作成にかかる作業や授業後のミーティングを大切にしており、授業に関わった教師・補助者作成の報告書及び、教案教材を関係者で共有している。PW は、縦横 (コーディネーター・アドバイザー・教師・補助者) の連携なくして成立しないワークであることから、意見の擦りあわせや現状の確認を密にし、これにより、対人関係を築く力が鍛えられている (F)。

5. 事業成果

5.1. 活動概要と参加学生内訳 (所属・参加人数) / 事業に関わった U-ToC の学習者内訳 (国籍・人数)

まず、事業の活動に参加した本学学生の所属は、経営学部 (浜松キャンパス)、外国語学部 (静岡草薙キャンパス)、健康プロデュース学部 (浜松キャンパス) の3学部である。U-ToC は浜松市にあるため、外国語学部の学生にとっては現地への移動に難があったが、それをこえて参加した学生が8名いたことも成果の1つとして挙げられる。

活動内容と参加人数は、① PW のインタビューイーやアンケート回答者として95名、② PW 発表会 (10月24日、於：常葉大学浜松キャンパス / 3月12日、於：U-ToC) の準備・運営・聴講者として29名、③ U-ToC の施設見学・授業参観参加者として16名であり、合計140名 (延べ人数) が本事業に関わった。詳細は、表1を参照されたい。

次に、本事業に参加した U-ToC 学習者の国籍及び、人数を記す。PW クラスは、

4.2.2. で述べたように、開講されるクラスの中で最上級に位置しており、初級のテキスト学習を終えた者のうち、一定の日本語力が認められた学習者が在籍している。PW は、2 期制となっており、第 1 期が 7 月～9 月に、第 2 期が 1 月～3 月に開講されたが、どちらの期の学習者とも交流することができた。本学学生と交流のあった学習者は、13 の国・地域（中国・ペルー・インド・ブラジル・フィリピン・インドネシア・ベトナム・マレーシア・フランス・タイ・ケニア・カメルーン・台湾）出身の合計 45 名（延べ人数）であった。

表 1 研究活動の概要（活動内容・常葉大学学生の参加者）

	実施日	活動内容	活動番号	学部（大学院）			小計
				経営	外国語	健プロ ¹⁴	
1	8/10 (金)	PW インタビューイヤーとして参加	①	2 名 -2 年		2 名 -2 年	4 名
2	6～8 月	PW アンケート回答者として参加	①	77 名 -1・2 年			77 名
3	8/10 (金)	PW インタビューイヤーとして参加	①	3 名 -4 年		1 名 - 院生	4 名
4	10/24 (水)	PW 発表会（於：浜松キャンパス）準備・運営スタッフ、聴講者として参加	②	27 名 -1-3 年			27 名
5	11/29 (木)	施設見学・授業参観	③	3 名 -1・2 年	3 名 -2 年		6 名
6	2/12 (火)	施設見学・授業参観・PW インタビューイヤーとして参加	①③	6 名 -1・2 年	4 名 -2・3 年		10 名
7	3/12 (火)	PW 発表会（於：U-ToC）聴講者として参加	②	1 名 -2 年	1 名 -3 年		2 名
合計（延べ人数）							140 名

5.2. プロジェクトワーク発表会（10 月 24 日）の聴講者用アンケート結果

当日は、60 名を超える来場者がおり、本イベントに関するアンケートへの回答を依頼したところ、34 名の提出があった。以下に主な質問とその回答を記す。

質問 1：本日のイベントはいかがでしたか。（1 つ選んでください）。

とてもよかった まあまあよかった ふつう あまりよくなかった ぜんぜんよくなかった

質問 2：本日のイベントに参加して、感じたことに○をつけてください（いくつでも）

外国人の視点が知れた 外国人に興味を湧いた 発表者の頑張りを感じた

¹⁴ 健康プロデュース学部

外国人と日本人の共生について考える機会になった 勇気をもらった
楽しい時間が過ごせた 発表者の国について知りたくなった
外国人との距離が縮まった 自分も頑張ろうと思った その他 ()

質問 1 については、「とてもよかった」21 名 (61.7%)、「まあまあよかった」9 名 (28.5%)、「ふつう」3 名 (8.8%)、無回答 1 名 (3%) であり、「とても」と「まあまあ」を合わせ、90%を超えており、好評であったことが窺える。

質問 2 は、計 98 個の選択があった。そのうち、10 個以上丸がつけられたものについて得票順に記すと、「発表者の頑張りを感じた」28 名、「外国人の視点が知れた」26 名、「外国人と日本人の共生について考える機会になった」14 名であった。これらから、外国語でプレゼンテーションをする発表者の努力に感銘しつつ、外国人の視点を通して日本・日本人を客観視したり、共生社会へと思いをはせたりする機会となったのではないかと思われる。

5.3. 参加学生作成の報告書から見えるもの

本事業では、常葉大学の学生が、U-ToC の施設や授業の見学をしたり、PW のインタビューイー、アンケート回答者として日本語学習者との交流を行ったり、PW 発表会時の準備・運営などに携わったりした。それぞれの活動後、振り返りをするために、報告書を提出してもらった。報告書からは、学生の気づきや学びが読み取れる。以下、1) 教師 (教え方・姿勢)・授業内容 (構成・目的や目標)、2) 学習者 (姿勢・意識・成長・日本語力)、3) 学習環境・施設 (U-ToC の特徴・課題)、4) 多文化共生への気づき (学習者の環境・外国人の視点・日本の課題)、5) 内省 (外国語学習・日本語教育・日本語・やさしい日本語・ボランティア) の 5 つのカテゴリーに分け、順番に紹介する (誤字脱字はそのまま記載した)。

1) 教師 (教え方・姿勢)・授業内容 (構成・目的や目標)

- CD で音声を流し、場面を連想させ、復習した相槌のうちどの相槌がその場面に適しているのかを学習者に考えてもらう学習をしていた。自分の意見としてはこの学習方法は実際に使うことができる日本語を身に着けるのにとっても有用だと考える。(中略)使うことができる外国語を身に着けるのであれば、学習者が自分自身で考え、実践に近い形で練習し、経験をしていくことが体に訴える学習となり、より知識を自分のもの出来るだろうと考える。(経営学部 2 年生)
- 常に能動的な授業が行われていて、学習する空間も学習者の皆さんにとって大事なことだと感じました。一応教科書もあるようでしたが、あまり使われていないように思いました。(中略)授業内での教科書の役割を意識することで、より能動的な授業につながるのではないかと考えました。(外国語学部 2 年生)

- 先生について気付いたことです。一番に思ったことは、先生の重要さ、教えることの大変さでした。もちろん先生方は授業前に念入りな準備を行っていると思います。しかし、その場その場での対応力が試されると思うのでしっかりとした知識が必要になるのではと思いました。(中略) また、基本的なことですが、生徒たちの顔を見て授業することは、先生にとっても生徒のみなさんにとってもいいことだと思いました。ペア学習のときも、この字型の空間であることを利用して、先生が頻繁に歩き、常にどこかのペアに付いて、間違いを直したりアドバイスしたりしていました。授業中の先生と生徒のみなさんの距離がいい意味で近いなと思いました。(外国語学部2年生)
- 2回目の授業見学で前回と同様に感じたことは、日本で生活を送るうえで困らないようにという目的意識です。日本独特の表現や文化を学び生活に慣れていくことがとても大切です。授業内容から、その目的意識がとても伝わりました。(外国語学部2年生)
- 授業構成としては、教科書の復習から始まり次回の予告をすべて日本語で行われていた。授業の中で発声の反復はあまりやらせず、学習者の方々がシャドウイングを行いスムーズな授業進行と文法、語彙の能力アップを図っていた。また、授業の後半では、いくつかの例文を挙げそれらを繋げる、パターンプラクティスを行っていた。パターンプラクティスでは、いくつかの形式のもの(代入練習、拡張、応答練習など)を織り交ぜ、学習者のレベルが均等に上達するように丁寧に授業をしていた。(経営学部2年生)
- 今回の授業は話す、聞く、書く、読むといった4技能全てが万遍なく使われており、学習者の方にとってはとても良い授業だったのではないかと感じた。インタビューは話すことと聞くことが中心であり、より実用的な日本語運用の際に必要な知識を学べたのではないかと思う。(外国語学部3年生)
- 日本語学校では授業の冒頭に学習内容や到達目標の確認をしないが、浜松市外国人学習支援センターでは確認をしていた。確認することで学習者自身が何を学ぶのか、何ができるようになるのかを知ることができるのでとても良い活動だと感じた。(外国語学部3年生)
- 一つ疑問に思った点として、授業中、学習者同士で話す機会があまりないと感じた。その授業やレベルの関係かもしれないが、学習者同士で話す機会がもっとあった方が良いと思った。私の経験から授業内で外国語を話す機会が多ければ多いほど、その分早くその言語を習得できると思う。また、授業内で間違いをしても、教師がその間違いを指摘でき、自分が間違えたということにも気づけることができる。(外

国語学部2年生)

以上から、授業参観を通して、外国語教育のポイントを再確認したり、日本で生活していく上で必要な日本語を習得させるためのスキルや工夫、到達目標明示の重要性に気づいたりしている。それに留まらず、自分なりの観点ではあるが、授業を批判的に観察する様子も見て取れる。本事業で数回実施した授業参観が、教え方や授業づくりに関する新たなビリーフを獲得する機会になったことが窺える。

2) 学習者(姿勢・意識・成長・日本語力)

- 印象的だったのは、生徒のみなさんが積極的に授業に参加していることでした。もちろん人それぞれで、人前で話すのが苦手な方もいましたが、授業を受ける学習者のみなさんから、日本語を学びたいという意思をととても感じました。(外国語学部2年生)
- 三月十二日の発表会では、学習者の方々の発音が、いままでの授業での発音よりもとてもきれいで、約半年間ではあったが、成長速度から、日本語と日本の文化に対する意識がとても高いものだと感じた。今までの授業や、リハーサルなどでは、単語の境目が理解できず、ひらがなを続けて読み、適切でないところで話を区切っていたが、発表会では、スムーズに話をしていて、そこに高い成長性を感じた。また、ポスター前発表の質問に対して、どの発表者の方も適切な日本語で返答していて素晴らしいと感じた。(経営学部2年生)
- 日本語はカタカナ以外にも接続詞や、副詞などが原因でとても難しい言語だといわれているが、日本で生きるために、日本語と日本の文化に前向きに付き合っていく彼らの姿勢はとても素晴らしいといつも感じている。(経営学部2年生)

以上から、日本語学習者が、日本に適応しようと日本語、日本文化と向き合い、熱心に学び、成長する姿を目の当たりにし、感銘を受ける様子を読み取れる。

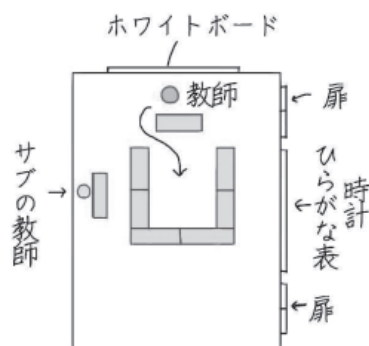
3) 学習環境・施設(U-ToCの特徴・課題)

- 授業見学前に、施設の中を少しだけ見学させてもらいました。教室の外には、様々な日本の行事を体験したときの写真がはってありました。スムーズに社会にできるような、語学を勉強するだけでなくイベントにも参加しているそうです。(外国語学部2年生)
- 机も椅子も動かしやすいものを利用していた。学習者はコの字で座っていて、学習者同士も話やすく、教師から全員の顔が見えるようになっていた。教師が学習者の近くまで行ける構造になっていた。教室は広くてとても開放的だと

思った。教室の壁にはひらがな表があり、学習者の目が届く位置に掲示することで記憶しやすいように工夫されていた。(外国語学部 2 年生)

- 施設では、日本で最先端の施設と聞き、今後の多文化共生にはなくてはならない存在と思いました。また、託児所があり、自分たちのような学生とは違った生活の中で、日本語を学んでいる人や施設の努力が垣間見えました。(経営学部 1 年生)

〈初級クラス授業の教室〉



- 日本語学校では 1 クラス 1 名に対し、浜松市外国人学習支援センターでは 1 クラス 3 名 (主に授業を担当する先生 1 名、補佐 2 名) だった。浜松市外国人学習支援センターでは補佐の先生がプリントの配布を手伝い、テストの採点も行ってた。(外国語学部 2 年生)
- おしゃべりタイム (筆者註：日本語教師による授業とは別に、ボランティアの方企画運営の昼休みに行われる学習者との交流活動) の目的としては、日本人との交流とともに日本語力の向上だと考えられる。日本語を学習していても、学習者は家庭内では必ずしも日本語を話すとは限らず母語を話していることがある。1 日の中で、1 番日本語を話す場所は U-ToC と答える学習者もいる。(中略) 時には、日本での生活で困っていることなどの相談事を受けるとボランティアの方は言っていた。身近に相談できる人がいるというのは、学習者に大きな安心感を与える。(外国語学部 2 年生)
- 施設内に、託児所があることに驚いた。子供を持つ学習者が学びにくる際、彼ら子供のことを心配せず、学習できるように設けてあると聞き、家族で日本来た学習者にとってかなり便利であると思う。また、(中略) 学習者が授業や自習で使える教科書や参考書などが数多くあったり、教室のある廊下の壁に、学習者が授業内で作成したポスターやグラフなどが貼られてあったりと施設全体が学校であるように感じた。(外国語学部 2 年生)
- 課題もある。その女性は、2 人の子供をお持ちで 1 人は保育園に通っていて、もう 1 人は U-ToC の託児サービスを利用している。毎朝、家事をして子供を保育園に送って U-ToC に向かう。毎朝、とてもバタバタして大変と言っていた。解決策としては、初級クラスを午前と午後を開講し、受講できる人数も増やすことだ。受講人数の上限は、浜松市に在住している外国人の数に適しているとは思えない。そのため、日本人の日本語教育ボランティアの育成や地域住民のさらなる協力など改善

する点はあると思った¹⁵。(外国語学部2年生)

以上から、安心して学習に専念し、効率よく学べるよう、また、日本社会へのスムーズな適応ができるように整備された様々な配慮に触れ、U-ToCの特徴を知るとともに、その存在意義に気づく様子をうかがい知ることができる。同時に、いち訪問者としてU-ToCの抱える課題にまで思いを馳せる学生もおり、教授スキルなどに留まらず広い視野で観察していたことが読み取れる。

4) 多文化共生への気づき(学習者の環境・外国人の視点・日本の課題)

- 私が、お話しさせていただいたベトナム人女性の方はU-ToCに通う前は、買い物以外はほとんど家にいたと言っていた。近所の人との付き合いもなく、心細く孤独な生活を送っていたようだ。市役所でU-ToCを紹介されて通い始めてからは、おしゃべりタイムはもちろん他の学習者との関わりをもつようになり、U-ToCに来るのが毎日とても楽しいと笑顔で言っていた。(外国語学部2年生)
- インタビューの体験は自分にとってとてもいい経験になりました。まずテーマから質問まで全て生徒さんが考えていることに驚きました。また、そのテーマや質問を通して、外国人の視点から見て日本の疑問に思う点が様々で興味深かったです。普段私たちが疑問に思わないことでも、質問されてみると意外と、どうしてだろうと思う質問がたくさんありました。(外国語学部2年生)
- 去年、入管法が改正される法律が成立し、外国人受け入れに向けた様々な変化が見られますが、まだまだ外国人の受け入れには不十分なことが多々あると思います。日本人にもっと外国人を受け入れることや、浜松市外国人学習支援センターのような施設のことも知ってもらうことができたらと思いました。(外国語学部2年生)
- 改めてこれからはもっと外国人をサポートする施設が増えていけたらいいなと思いました。日本では、これからも外国人が増えると思うので、このような日本語に慣れていない外国人にもわかりやすい授業が増えていくことは、日本人にも外国人にも大事な活動だと思います。(経営学部1年生)

以上から、外国人の視点を通して、日本や日本人の捉えなおしを行っている様子がわかる。また、日本に暮らす外国人が孤独な環境に置かれがちであること、その方たちの大切な居場所であり、日本語学習の場となるU-ToCのような施設がもっと必要であることをより多くの日本人に知ってほしいとの願いが語られている。そして、施設の設置やわかりやすい授業の提供は、外国人住民と日本人住民双方にとって重要と

¹⁵ 3で述べたが、実際には、U-ToCでは、外国人の学習支援のために日本語ボランティア養成講座を事業として展開している。

の気づきを得ているようだ。

5) 内省（外国語学習・日本語教育・日本語・やさしい日本語・ボランティア）

- 生徒の皆さんが、語学を学ぶとともに日本文化にも慣れ親しんでくれていることがとても嬉しかったです。また、改めて語学だけを学び話すことができるだけではないということも実感させられました。（外国語学部2年生）
- 全く違う国籍の方と、何らかの共通言語で会話ができること、その共通言語が日本語であることがとても嬉しかったです。日本の様々な地域で、日本語教育への関心を深めていきたいとも思いました。（外国語学部2年生）
- インタビューをするにあたって使う表現やあいづちをこの日までの授業で学び、今回は授業の初めに復習していました。あいづちは、私たち日本人は誰かから教えてもらうことはありませんが、生活を振り返るとあいづちを頻繁に使っていると思いました。頻繁に使っているということは、日本人の会話の中で重要な役割を果たしているということです。しかし、外国人からすればこのあいづちはとても難しいものであることに気づきました。（外国語学部2年生）
- 参加してみて考えたことが、日本語を簡単に表現するということが、一番難しかったです。これは、思ったことをすぐに言葉にする頭の回転の速さが必要ということ、自分に足りていないものを再確認しました。参加後は、自分の知識や語彙力を高めたいと思いました。ボランティアとはいえど、教える、サポートするなどのおごり高ぶっていた自分の未熟さを再確認できました。（経営学部1年生）
- 自分自身は、簡単だと思っている単語が学習者にとっては、難しい単語であることや日本人と学習者とで説明の仕方を代えないといけないことを主に学んだ。いわゆる、「やさしい日本語」¹⁶を学習者のために、私が勉強する必要があると感じた。（外国語学部2年生）
- 参加して感じたことは、自分の未熟さに改めて気づけたことです。ボランティアは与えるものよりも、得られるものの方が多いと考えます。今回も同じで、自分の課題や、苦手なことが次につなげることができるので、いい経験ができました。（経営学部1年生）

¹⁶ やさしい日本語とは、「多言語対応協議会ポータルサイト」（東京都オリンピック・パラリンピック準備局）によると、「普通の日本語よりも簡単で、外国人にもわかりやすい日本語のこと」と定義されている。また、次の下位カテゴリーに分かれるとのことである。

・災害時の情報提供としての「やさしい日本語」・平時の情報提供としての「やさしい日本語」・観光のツールとしての「やさしい日本語」・報道のツールとしての「やさしい日本語」

- 学習者は一人ひとり習熟度が異なる。学習者のレベルに合わせた話し方をすることの大切さを改めて学んだ。(外国語学部 3 年生)
- 日本語を全然知らなかった学習者の方々が日常会話をすることができるほどまでになっているのを見て、私も英語をはじめとする日本語以外の言語の勉強を頑張らなければいけないと感じました。また、日本語であっても、学習者に理解されなかった時すぐに言い換えられるように言葉の引き出しを増やしたいと思いました。生まれてきて毎日日本語を話しているのに、日本語の意味を教える、言葉を言い換えて教えることの難しさを学ぶことができました。日本語を学んでいる方々から、どのような日本語が難しいか、日本に来て驚いたことなど学ばせてもらうことがあり、とても有意義な時間を過ごすことができましたと思います。(経営学部 1 年生)
- 日本語学習者と実際、授業内の活動で対話してみて、私たちが日常、当たり前のように使う日本語の難しさを感じることができた。特に、学習者がわからない単語や文法を教えることの大変さを感じることができた。その大変さを感じると共に、日本語教育へ興味がより一層深まったと思う。これから日本に来る外国人が増えるので、ボランティアや今回のような視察など、学生だからできることを今のうちにやりたいと思う。(外国語学部 2 年生)

以上から、参加学生たちが、外国語学習や母語である日本語、異文化交流のメリット、日本語教育への関わり方、外国人との意思疎通に必要なやさしい日本語、ボランティアに対する思いなどと向き合い、自分自身と語り合いながら様々な気づきや学びを得ていることが読み取れる。

5.4. 事業成果（研究者と共同事業者の観点・立場から）

5.4.1. ゼミにおける卒業研究指導の観点から

筆者らの一名である山下は、経営学部のゼミナールにて日本語教育支援について調査研究を進めている。経営学部でこの研究課題に取り組む背景には、中小企業を中心とした効率的な日本語教育への需要の高まりがある。2019年4月の改正出入国管理法施行を受け、わが国では外国人労働者受け入れの増加が見込まれている。外国人労働者との円滑な意思疎通のためにも日本語教育に寄せられる期待は高いが、教育のためのコストは労働者自身にも中小企業にも大きな負担と考えられる。そこで我々は、スマートフォン等の ICT 機器を利用した日本語教育の効率性向上を検討することと、こうした取り組みを提供するビジネスの最適な収益モデルを検討することを目的として、本研究課題を設定している。

現在本課題では、いつでもどこでも手軽に学習できる対象としてドリル形式で日本語彙を学習するスマートフォンアプリの実装を目指している。想定中のアプリは主としてカタカナ語の語彙学習を指向している。大まかな機能は表示された画像を表す

語彙を入力させるものであるが、段階的にヒントを提示して円滑な学習を促すことを検討している。ヒント提示機能の実装には、語彙学習におけるヒントにはどのようなものがあるのか、段階的に提示するときどのような順序性を持たせればよいのか、等を明らかにする必要がある。

本交流事業は、本課題に取り組む学生と実際の日本語学習者とが直に交流できる貴重な機会である。そこで我々は日本語学習者に対し、交流事業の合間を見計らって簡単なカタカナ語の語彙テストを行ってもらった。テスト用紙の紙面の都合から、本テストでは画像の提示ではなくカタカナ語の原語となる英単語を提示し、その英単語を表すカタカナ語を解答してもらったものとした。テストは4つの問題群からなり、各問はそれぞれ次の形式で解答を記述させるものであった。

問1. 四つの選択肢から正解を選択させるもの

問2. 正解語彙に使用される文字を提示して文字を並べ替えさせるもの

問3. 正解語彙の一部文字を虫食い状に空欄として、空欄中の文字を記述させるもの

問4. ヒント等を与えずにカタカナ語彙をそのまま記述させるもの

各問の正答率や解答内容から、ヒント提示機能の実装に向けた知見を得ることを調査のねらいとした。

本調査では日本語学習歴1年から3年半の学習者8名から解答を得た。問ごとに採点した結果、正答率は問1が.713、問2が.575、問3が.525、問4が.375であった。この結果は、我々が想定する語彙学習アプリに何らかのヒントを提示する機能を盛り込むことが、利用者に解答を促すことに有効に作用する可能性を示唆している。また、問ごとに正答率が異なることは、ヒントを段階的に提示できる可能性を示唆するものである。

調査において、非英語圏出身者が提示された英単語を理解・認識できない場合が何件か見られた。今後、調査の量を増やしていくときには問題の提示方法を検討するなどの対策が必要と考えられる。

5.4.2. 外国語学習・外国語教育の観点から

2018年11月28日と2019年2月12日にU-ToCの施設と授業見学等を行った。参加学生は授業参観や施設見学、学習者との会話等を通し、自己の外国語学習についての振り返りをしたり、日本語教師志望の者は、先駆的な取り組みをする日本語教育の現場を見たりすることで大学の授業では得られない実践的な学びや気づきを得た。以下では見学後に参加学生が提出した事後レポートから彼らの学びや気づきの一部をカテゴリー別に提示する。

1) 学習環境に関する学び

- ・コの字型の座席配置
- ・語彙の表などの掲示物

2) 教師のフィードバック

- ・教師は学習者の発話一つ一つを大切に、間違った日本語の使い方をして

には、丁寧に直していた。

3) 能動的な授業と参加態度

- ・(学習者は) 授業時間内は発話をしていることがほとんど。
- ・授業内では、発話をするのが中心で頭にも残りやすい。
- ・学習者同士が助け合っている場面が多くみられた。

4) 外国人学習者の置かれた状況

- ・日本語を学習しても日本語を話す場所がない。

5) 自分の外国語学習への反省

- ・10 年も英語を学習している私は日常会話ですらままならず、情けなく、そして悔しく、恥ずかしいとさえ思った。
- ・自分も外国語を学ぶ身として、読み書きや会話に限らず実際にその言語を使うことが上達につながると再確認した。

6) 日本社会の見直し

- ・外国人の視点から見て日本の疑問に思う点が様々で興味深い

7) 日本語の見直し

- ・自分自身は、簡単だと思っている単語が学習者にとっては、難しい単語であることや日本人と学習者とで説明の仕方を代えないといけないことを主に学んだ。いわゆる、「やさしい日本語」を学習者のために、私が勉強する必要があると感じた。

日本語教育関係の授業では具体的な日本語の教え方から第 2 言語習得理論、日本語学などに関する内容などを扱うが、どうしても知識中心になってしまい、実感の伴わない抽象的な概念にしかならないことが多いが、実際に外国人と接したり、日本語の授業を見学したりすることで大学で学んだ知識が具体化していくようである。今後、様々な機会を通して、日本語教育を学ぶ学生に現場を体験させる機会を提供すべきだと感じている。

5.4.3. 国際交流協会・日本語教室主催の立場から

U-ToC から見た日本語プロジェクトワークにおける大学との連携効果は次の 2 点である。

まず、1 点目は、教室の外部との連携により、日本語学習を教室の中だけに閉じ込めない環境が作れたことである。U-ToC で学ぶ学習者は生活者である。教室内（いわば仮想空間）で日本語を聞いたり話したりできるようになることがゴールではなく、学んだ言葉を現実の世界で使えるようになることが重要である。今回、U-ToC の学習者と大学生は、年代が比較的近かったことから、学習者にとっては、リラックスしながらリアルな日本語会話の練習をすることができたようだ。このことがきっかけで交流が進み、友人ができた学習者もいる。U-ToC での学習を終える前に、安心できる環境の中で現実社会との接点を持つ機会が持てたことは、その後の実生活に役に立つと考えられる。

2点目は、専門家からのアドバイスを受け、授業内容の改善につながったことである。地域の日本語教育は、専門的知見によるノウハウの積み上げが少なく、担当教師の経験と勘で進められてきた。今回の連携事業により、大学生との実践の場の協力を得ながら、PDCA サイクル（PLAN「アドバイザーからカリキュラム作成におけるアドバイスを受け」DO「インタビューやアンケートを大学生に実施し」CHECK「アドバイザーによる授業の立会いや振り返りでのコメントを得て」ACT「カリキュラム改善につなげる」）の実践の場になったことは、教師やコーディネーターにとって、闇雲に授業の回数を重ねるだけではなく、1回1回の授業が連動し、カリキュラムを通じてスパイラルに向上していくことを実感する機会になった。このことは、教師やコーディネーターの成長につながり、より実践的で効果的な日本語学習の場を学習者に提供することができるようになると期待される。

5.4.4. 事業全体を概観して

本事業では、1) 生活者としての外国人の日本社会へのスムーズな適応を促すこと、2) 常葉大学大学生の多文化共生の意識を涵養すること、3) 外国人住民と日本人住民の交流の成果を社会に発信すること、の3点を目的に活動を行ったが、それぞれの達成度について以下で内省したい。

まず、1) についてだが、5.4.3 で述べたように、学習者がほぼ同じ年代の大学生との交流を通じて日本社会との接点を感じたこと、また、普段は遠い存在である日本の大学にて教職員や大学生など日本人を前に発表を成功させたことは、今後日本で生活していく上で大きな自信と力になったのではないと思われる。それは、授業後や発表会后に聞かれた感想から十分に読み取ることができた。

次に、2) に関しては、本学の学生は、インタビューイーやアンケート回答者、施設見学・授業参観、また、発表会の準備・運営スタッフ・聴講者など何らかの形で生活者としての外国人に接する機会を持った。加えて、浜松市の先進的な多文化共生への取り組みに触れる経験を経て、「共に社会を創る住民」との意識が芽生えたことが学生作成の報告書から窺えた。以下に意識涵養と捉えられる学生の声を再掲する。

- 日本で生きるために、日本語と日本の文化に前向きに付き合っていく彼らの姿勢はとても素晴らしい
- 託児所があり、自分たちのような学生とは違った生活の中で、日本語を学んでいる人や施設の努力が垣間見えました。
- 日本人の日本語教育ボランティアの育成や地域住民のさらなる協力など改善する点はあると思った。
- 日本人にもっと外国人を受け入れることや、浜松市外国人学習支援センターのような施設のこと知ってもらえることができたらしかったです。
- 日本語に慣れていない外国人にもわかりやすい授業が増えていくことは、日本人にも外国人にも大事な活動だと思います。
- 「やさしい日本語」を学習者のために、私が勉強する必要があると感じた。

- ・学習者は一人ひとり習熟度が異なる。学習者のレベルに合わせた話し方をするこの大切さを改めて学んだ。

また、本事業に参加した学生達が「1・2・3異文化交流サークル」を立ち上げたことは、外国人との接点を持つこと、つまり「知ること」の大切さを何よりも象徴していると考えられる。発起人の経営学部3年の刈谷香介君は、「楽しい時間だった U-ToC の学習者との交流体験を、友達や周りの人にも味わってもらい、外国人を身近に感じてもらいたと思って、サークルを作りました」と話してくれた。異なる言語と文化、習慣を有する外国人が、実は、遠い存在でなく、隣に住む同じ住民なのだと知り、その思いを多くの仲間にも共有してほしいと輪が広がったことは、目的2) が達成できた根拠の一つになりうるだろう。

最後に、3) については、2度のプロジェクトワーク発表会（①於：U-ToC、②於：浜松キャンパス）、2019年9月10日実施の本学地域連携事業実施報告会、そして、本紀要への投稿などによって、達せられたと思っている。また、2月12日の U-ToC における授業参観・交流会の様子が中日新聞・静岡新聞に記事として掲載されたが、このようなメディアを通じた発信は、多文化共生社会の意義を社会に訴えるよい材料となったと考える（本稿末の「資料」参照）。

6. 課題と今後の展開

本事業では、浜松国際交流協会との連携により、日本人住民と外国人住民の交流を行い、多文化共生に資する一定の成果を上げることができたと思われるが、課題も残った。以下、二点に焦点を当てて、記したい。

一点目は、PW 発表会（10月24日・於：浜松キャンパス）の聴講者として、関係者以外の日本人住民（本学学生・一般市民）の集客が期待ほどなかったことが挙げられる。聴講者総数は、60名を超え、主催側の目標に達しているが、地域在住外国人の存在や考えに触れ、「共に暮らす住民」としての意識涵養が求められるのは、多文化共生の現場周縁にいる人々である。外国人住民をサポートする立場にあたり、日本語教育に携わったりする人々は、常に暖かな眼差しで外国人に接している。しかし、それ以外の多くの人々にとっての外国人は、同じ日本にしながら「関心の外」に置かれる存在にも見える。「共に社会を創っていく住民」との意識涵養を図るにはまずは「知る」ことから始めることが肝要であり、PW 発表会はそのきっかけとなりうると思えている。したがって、今後は広報をいかに効果的に行うかが課題となるだろう。

二点目は、本事業に関して、外国人住民側（U-ToC の学習者）の声をアンケート調査などで聞けなかったことである。本学の学生にインタビューをしたり交流会で触れ合ったりするなどした体験が彼らにどんな影響を与えたのかを、質問紙調査や半構造化インタビューなどを通して拾い上げることで成果が鮮明に見えてくると思われる。

今後の展開として、PW のインタビューイー・アンケート回答者としての関わりは

継続するとともに、1・2・3 異文化交流サークルが中心となり、本学学生自らが学習者との交流会を企画・運営し、主体的に生活者としての外国人と触れ合う機会を創出したい。また、U-ToC の要望に応え、1) 日本語教育が専門の坂本・谷を中心に、U-ToC や地域日本語教室の教師等に対する技術的サポートを、2) 日本語能力測定テストを坂本・谷を中心に作成した上で、情報科学が専門の山下が、ゼミの日本語教育班等においてスマートフォンで実施可能な日本語テスト開発に向けた準備を進める予定である。2018 年度の事業終了後、実際に新たな交流が始まっている。まず、2019 年 8 月 22 日に 1・2・3 異文化交流サークルのメンバー及び、山下ゼミの学生の計 7 名が U-ToC を訪問し、授業参観や学習者との交流を行った他、8 月 28 日には坂本と谷が、U-ToC にて 30 名ほどの日本語教師を対象に「専門家から学ぶ日本語テストの作り方」とのテーマで講義・ワークショップをさせていただいた。

以上のように、今後も今回の事業を発展的に継続し、HICE との交流・連携を深めて多文化共生社会の実現に向け、活動をしていきたいと考えている。

謝辞

本事業の交流・連携先にとの依頼をご快諾くださった HICE 事務局長加藤智春様、本学の大学生の授業見学を受け入れて頂いた U-ToC の先生方と学習者の皆さんに感謝申し上げます。

参考文献

- 鹿嶋恵 (2005) 「初級準備段階としてのサバイバル・ジャパニーズのシラバス検討」『三重大学留学生センター紀要』7 巻、pp.35-48.
- 「多言語対応協議会ポータルサイト」(東京都オリンピック・パラリンピック準備局)
<https://www.2020games.metro.tokyo.lg.jp/multilingual/references/easyjpn.html> (2019 年 9 月 9 日閲覧)
- 田中望・斎藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際—学習支援システムの開発—』大修館書店
- 文化庁 (2010) 『日本語教育研究委託「生活日本語の指導力の評価に関する調査研究：報告書」』
http://www.bunka.go.jp/tokei_hakusho_shuppan/tokeichosa/nihongo_shidoryoku_hyoka/pdf/shidouryoku_hyouka.pdf (2019 年 11 月 6 日閲覧)
- 文化庁「日本語教育の推進に関する法律の施行について (通知)」
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunka_gyosei/shokan_horei/other/suishin_houritsu/1418260.html (2019 年 11 月 5 日閲覧)
- 文化庁「平成 29 年度国内の日本語教育の概要」
http://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/kokugo/nihongo/nihongo_87/pdf/r1408014_11.pdf (2019 年 11 月 6 日閲覧)

資料

1) 「活動の様子を取り上げた新聞記事」

中日新聞 (浜松・遠州)・朝刊
2019年(平成31年)2月13日(水)

↑

日本語学習者と交流



外国人支援センターで常葉大生

日本語学習者の間に響く常葉大生ら 浜松市西区外国人支援センターで

常葉大学浜松キャンパス(浜松市北区)の学生十人が十二日、浜松市西区の市外国人学習支援センターで日本語学習者と交流した。隣国に思ったことを調べた日本語で発表する「プロジェクト」を発表した。

十代から四十代の外国人十人が学生たちの講義の講義時間や、好きな食事の味付けに例として質問。学生たちは、身ぶり手ぶりを交えながら答えていった。中には字彙語の「体験の意味」を聞いて、難解なを

静岡新聞 (地域 西)・朝刊
2019年(平成31年)2月13日(水)

↑

**常葉大生 外国人と交流
西区 多文化共生 理解深める**



外国人の質問に答える学生たち 浜松市西区の市外国人学習支援センター

母国では動物と遊ぶのが一般的。外国人からは「どうして日本の子どもは自分たちだけ行くのか」という疑問に関する質問を受けた。学生は言葉を選ばず、丁寧に回答した。

外国人の質問に答える学生たち 浜松市西区の市外国人学習支援センター

常葉大の経営学部と外国語学部の1年生十人が、昨日、浜松市西区の市外国人学習支援センターを訪れ、日本語学習者と交流した。学生は日本語学習者の発表に参加し、外国人の日本文化や習慣に関する質問に答えながら、多文化共生について理解を深めた。

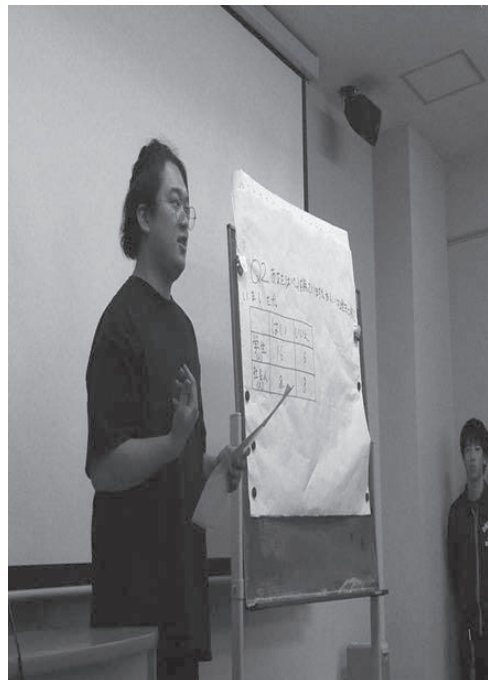
「日本に住んでいるのに、どうしてこのアンケートを取り、結果を分析して発表するプロジェクトなの？」との質問に、10人の学生が答えている。

経営学部3年の刈谷介さん(19)は、「母ががっつり出身。異文化に興味があった。外国人に日本文化を伝えることで、親に理解されたい」と話した。(森野子)

2) 本事業の活動の様子



プロジェクトワーク発表会・交流会（2018年10月24日 於：浜松キャンパス）
※常葉大学留学生別科生（4名）・U-ToCの学習者（5名）の合同にて





U-ToC における授業参観・交流会 (2018 年 11 月 29 日)



U-ToC における授業参観・交流会 (2019 年 2 月 12 日)